石川県

街道１

石川県を代表する橋は、図月橋（金沢市、享保 19（1734）以降?、県名勝）A である。多くの地元の WEB サイトでは、図月橋の建造年代を寛永 19（1642）頃とし、神社が建てられる以前の金沢城出丸金谷御殿の庭園橋と紹介されている（同じ出典からのコピーと思われる）。しかし、『城下町金沢学術研究１』

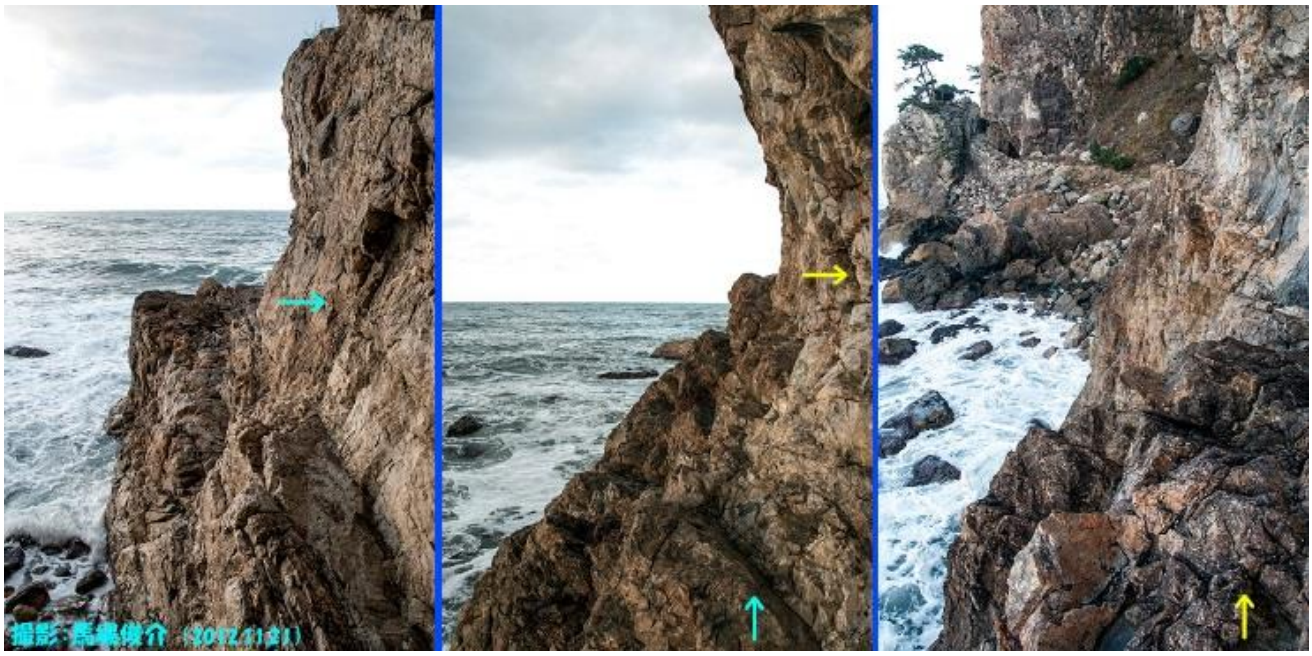
の第１分冊（金沢市、2010、p.30 には、「享保 19（1734）に金谷御殿が建設され」とあるので、それ以前から庭園があったとは考えにくい。従って、図月橋の建造年は享保 19 以降と考えるのが妥当であろう。ただ、迫石が各アーチ３個という少なさは、九州の定番的な石アーチと比べれば異例であり、側壁の「薄い石材をまばらに埋め込んだ漆喰（?）壁」という構造も異例である。江戸時代に九州以外で造られた石アーチは極めて少ないが、その中でもひときわ特異な橋であり、「誰が、どうやって」という経緯について、今後の学術的な研究の成果を待ちたい。

街道２

殿様道（七尾市、文政 10（1827）、市史跡）B は、県内に残る唯一の本格的な石畳道で、延長は約 500 m である。翌文政 11 に、幕府の巡検上使が通った他、嘉永 6（1853）に加賀藩第十三代藩主・前田斉泰が能登巡検をした際にも通った道とされる。敷石部は道幅の半分程度であるが、土道との境界は縁石できれいに仕切られている。

街道３

石川県で最も感動的で面白く他に例のない遺産が曽々木の岩崖道（輪島市、寛政 4（1792））A である。かつて、能登半島の最北端に突き出た岩倉山沿



いの「ヒロギの嶮」は、道なき道で転落死が絶えなかった。みかねた禅宗寺院・海蔵寺の八代目の住持・麒山瑞麟和尚が、托鉢行脚して浄財を集め、工事の先頭にも立ち、13 年をかけて断崖路を開いた。明治に入り素掘りのトンネルができたため誰も通らなくなり、改修されることなく現在に至っている。前ページの最下段には、断崖路の角を曲がり、崖を伝って行くと一気に視界が開ける状況を、左→右の３枚の連続写真を使って再構成している。危険なので立入りは勧められないが、岩肌に沿って海を高く巻くように付けられた断崖路には心が洗われる。

街道４

大聖寺永町の道標（加賀市、安政 5（1858）、市有形）B は、温泉遺産という観点から重要な道標である。この道標には、正面中央に「山中温泉道、是ヨリ／三リ」、その上に「やまなかや菊は／たおらじ／湯のにほひ」と一種の“広告”まで刻字されている。江戸期の道標で温泉をメインに示したものは、他に群馬県の草津温泉くらいしか例がなく、稀少な存在である。

舟運１

北前船の重要な寄港地であった福浦湊には、崖一面に目繰り（志賀町、江戸期、町有形民俗）A が残っている（右上の写真）。夜に沖合を通る船のため元禄年間に灯明台も造られたが、現在「木造最古の灯台」として史跡指定されているものは、明治 9（1876）に造られたものである。福浦には日和山の方角石（志賀町、弘化 4（1847）、町建造物）B も残っている。

舟運２

方角石という観点のみに立つと、輪島の日和山方角石（輪島市、享和 4（1804）、市史跡）A は、現存最古の方角石として知られている。ただし、三重県の項で記したように大的矢の初代方角石の方が古い可能性が高いだけでなく、輪島の方角石は保存に対する配慮に欠けている。

農業１

金沢城下は、岡山城下のように網の目状に用水路が張り巡らされているわけではないのに、水路がとても印象的である。それは、旧市街地を流れる大野庄用水（天正年間（1573-92）?、下の写真）A、鞍月用水（慶長 4（1599）?）A などが街並みとしっくりなじんで良好な水辺景観を演出しているからである。

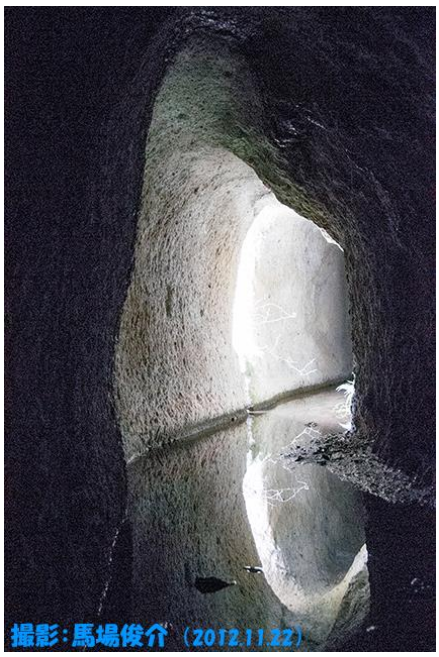
技術史的な観点では、辰巳用水（金沢市、寛永 9（1632）、国史跡）A は石川県で最も重要な遺産である。加賀藩第三代藩主・前田利常の命により板屋平四郎が完成させたとされるが、開削の表向きの理由は前年・寛永 8 の大火、実際には、防衛力の強化なども絡んでいたとされる。幕府から疑われない

よう公式記録がなく、完成後に板屋平四郎がどうなったかも不明である。辰巳用水で有名な施設はわが国有数のトンネル（当初長 3.3 キロ）で、現在でも２キロほどが現役で使われている。もう一つは最下流部の石川門前土手から二の丸に 16.2m水を上げるために使われた逆サイフォンで、古さでは佐賀の馬ン頭伏越に負けるが、高低差では国内随一と思われる。当初の木管は、天保 14（1843）頃から順次石管に交換されたが、この時の技術が富山の竜の口用水の逆サイフォンにも応用された。

農業２

石川で最大の用水路群は、手取川扇状地に放射状に形成されたものである。リストでは山島用水（白山市、平安後期頃以降）Aに高いランクを付けているが、それは山島用水が用水路群の中で最長という単純な理由によるもので、七ヶ用水を構成する残り６つの富樫用水、郷用水、中村用水（以上A）、大慶寺用水、新砂川用水（B）、中島用水（C）の価値は同等である。残念なことは、すべての用水路がコンクリートで改修され、往時を思わせるのは水面だけになってしまっている点である。

農業３



農業絡みのトンネルという点で、辰巳用水と重複するが、舟尾川のトンネル（七尾市、弘化年間（1844-48）、世界農業遺産）Bは、新田開発を目的として掘られた二宮川の放水路（全長約 700m）という意味で、性格が異なっている。

また、二ヶ用水隧道（能美市、弘化４（1847）、上の写真）Bは椎名道三の施工で、用水トンネルとしては天井が高く、明かり取りの窓が多い。そして、現在は使われていないので中に入れるのだが、その佇まいは数ある用水トンネルの中でも清楚で美しい。

農業遺産の最後は、盛土居（かほく市、享保 8（1723））Bである。長柄水路が谷を渡る部分に長さ 90m、高さ 20mの盛土を築き、その上に水路を通したものである。この種の構造としては、類例のない規模とされている。

衛生１

金沢には、良質の湧水が生活用水として利用されていた地域がある。それらのうち、上の清水（金沢市、江戸期以前）Bと大清水（金沢市、江戸期）Cは、今でも清冷な水を湧出している。